

Rasmussen の自我同一性尺度の日本語版の検討

宮 下 一 博*

AN EXAMINATION OF THE JAPANESE VERSION
OF RASMUSSEN'S EGO IDENTITY SCALE

Kazuhiro MIYASHITA

The purposes of the present study were to examine reliability and validity of Japanese version of Rasmussen's Ego Identity Scale (REIS). REIS, Trait-Anxiety Inventory, Identity Diffusion Scale, and Self-Esteem Scale were administered to 245 university students. Reliability of Rasmussen's Scale were assessed by split-half method and Cronbach's alpha coefficient. REIS were also administered a week later in order to analyze test-retest reliability. Correlations were performed between REIS and other three measures to examine concurrent and criterion-related validity. The results showed that REIS was a reliable and valid measure for Japanese university students. The necessity of future studies using this scale was suggested.

Key words: Rasmussen's Ego Identity Scale, reliability, validity.

問題と目的

自我同一性に関する研究は、海外ではもちろん我国においても毎年かなりの数が発表されている。その1つの流れは、Marcia (1965, 1966) により考案された、自我同一性ステイタス**面接(ego identity status interview)によるものである。この方法を用いた諸研究は、これまでたびたび紹介されている(鐘・山本・宮下, 1984; 高橋, 1984; Bourne, 1978 など)ので、本稿では詳述しないが、そのユニークな研究方法は、自我同一性に関する操作的研究を進展させる上で、大きな力となった。この方法による研究を我国で初めて行ったのは、無藤(1979)である。彼女の研究は、Marciaの原法に幾らか修正を加えているが、我国における Marcia 法研究の先駆となった。Marcia 法は、その後の研究者によって若干の

修正が加えられたり(Schenkel & Marcia, 1972; Hodgson & Fisher, 1979 など)、この方法を質問紙化して利用しようとする試み(Simmons, 1970; Adams, Shea, & Fitch, 1979; 福富, 1981 など)も行われているが、現在、自我同一性に関する主要な流れの1つを形成している。

もう1つの大きな自我同一性研究の流れは、自我同一性を尺度(質問紙)によってとらえようとするものであり、Eriksonの個体発達分化***の図式(epigenetic chart)や同一性感覚(sense of identity)などの定義に基づいて種類の尺度や質問紙が考案されている。外国では、Rasmussen(1961, 1964)やDignan(1965), Tan, Kendis, Fine, & Porac(1977), Rosenthal, Gurney, & Moore(1981)らの尺度が次々と開発されてきた。我国では、古沢(1968)の先駆的研究に始まり、砂田(1979), 遠藤(1981)らが独自の尺度を作成している。また、田端・乾原・西田・古瀬(1978)は、Tan et al.(1977)の尺度を、中西・佐方(1983)は、Rosenthal et al.(1981)の尺度をそれぞれ邦語訳し、日本語版として利用すべく研究を

* 千葉大学(Chiba University)

** これまでは、「自我同一性地位」と訳されることが多かったが、「地位」という言葉は、その人の身分や資格を意味するもので、パーソナリティの研究に適用するのは、余り適切とは思われない。本稿では、鐘ら(1984)に従い、statusをあえて訳さず、「自我同一性ステイタス」という訳語にした。

*** 従来は「漸成」などと訳されてきたが、本稿では鐘ら(1984)に従い、「個体発達分化」という訳語を採用した。

行ってきている。

一方、宮下・平野(1981)は、我国で利用できる自我同一性尺度が少ないことから、欧米諸国で利用されることの多い Rasmussen (1961) の自我同一性尺度を邦訳し、若干の信頼性と妥当性を検討した(この研究の一部は、鐘ら(1984)にも掲載されている)。この研究では比較的高い信頼性や妥当性は得られているものの、妥当性を検討する際の被験者数が少ないなどの点で問題点が残されている。Rasmussen の尺度は、1980年代に入っても、Woods & White (1981) や Wilkerson, Protinsky, Maxwell, & Lentner (1982) など頻繁に用いられ、自我同一性研究を進める上での1つの重要な尺度であると言える。

本稿では、宮下・平野(1981)の研究をさらに発展させ、日本版の Rasmussen 自我同一性尺度(以下、REIS と略記する)の信頼性・妥当性について検討することを目的とする。その際、これまでの、「はい」、「いいえ」による2件法の回答方法では、同一性の達成一拡散というごく大まかな判別に終始してしまうことを考慮し、7段階評定を採用することにした。これによって被験者の同一性達成を程度の問題としてより細かく検討することが可能となるように思われる。

方 法

被験者 国立C大学教育学部2年生245名(男83名、女162名)であった。また、1週間後、再度 REIS のみを実施したが、この2回とも REIS に回答した者は、合計228名(男73名、女155名)であった。

質問紙(1) REIS(宮下・平野, 1981の訳による72項目; 7段階評定。Erikson の発達図式の最初の6段階、すなわち基本的信頼対不信から親密性対孤立までに各々12項目が配置されている)。

(2) 特性不安尺度(清水・今栄, 1981の訳による20項目; 4段階評定)。

(3) 同一性混乱尺度(砂田, 1979による34項目; 3件法。Erikson の発達図式の青年期横軸の同一性拡散を示す8つの徴候、すなわち、①時間的展望の拡散、②自意識過剰、③役割固着、④労働麻痺、⑤同一性混乱、⑥両性的混乱、⑦権威混乱、⑧価値混乱の下位尺度から構成されている)。

(4) self-esteem 尺度(根本, 1972による27項目; 2件法。自己の能力・意見に対する肯定的確信、自己の人生に対する肯定的態度、独立・同情排除、劣等感*, 自己のパーソナリティや

能力の肯定的受け入れ、という5つの因子から構成されている)。

実施方法及び調査時期

上記4種の尺度を冊子とし、「教育心理学」の授業場面を利用して集団的に実施した。回答所要時間は30~40分であった。また、その1週間後に REIS のみ再度実施した。調査時期は、1986年6月下旬~7月上旬であった。

結果の処理法

REIS は、各項目とも同一性確立の程度の高いほど高得点となるように、7~1点を付与した。その他の3つの尺度については、いずれも所定の様式に従って得点化を行った。すなわち、A-Trait 尺度では、不安の高い方から順に4~1点を、同一性混乱尺度では、混乱の程度の高い方から2~0点を、また、self-esteem 尺度については、自尊心を方向づける回答に1点、その他に0点を与え、それぞれ得点化を行った。

結果と考察

1. REIS の項目分析

245名のデータについて、REIS の各項目の得点と全体得点との、ピアソンの偏差積率相関係数を算出し、項目分析を行った。その結果を示したのが TABLE 1である。これによると、項目No. 10, 32, 37, 61, 68の5項目が有意水準に達しておらず、これらを除く67項目を以下の分析の対象とした。この67項目の得点分布を示したのが FIG. 1である。きれいな正規分布とはいえないが、比較的よい分布といえよう。なお、TABLE 2には、245名の REIS (67項目)の平均得点と標準偏差を全体ならびに下位尺度別に算出したものを示した。

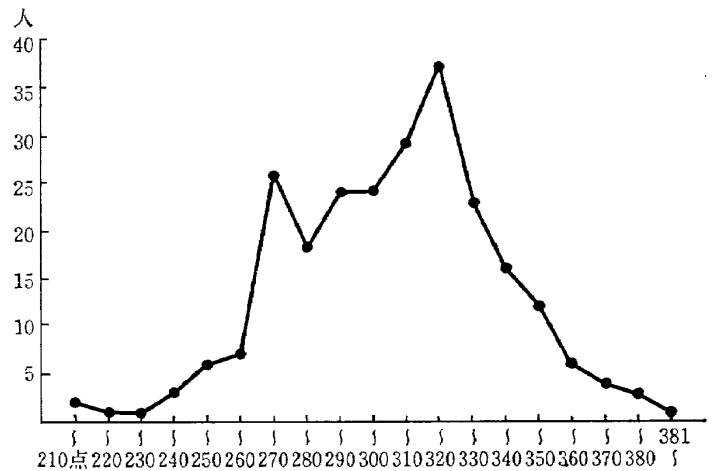


FIG. 1 REIS 全体得点の分布 (N=245)

2. REIS の信頼性

TABLE 3 に、REIS の67項目ならびに下位尺度ごとの、折半法(前後折半)及び α 係数による信頼性係数を示

* 得点化の際には、「劣等感」が高いほど低得点となるように処理される。

TABLE 1 Rasmussenの自我同一性尺度(REIS)の項目分析(N=245)

No.	下位尺度	項目	r
①(注1)	I(注2)	将来の目的や欲しいものを手に入れるために、現在の楽しみをあきらめるとしたら、悔いが残るであろう。	.139*
②	V	だれも私のことを理解してくれないように思う。	.429**
③	II	私は授業などで指されるのではないかと心配である。というのは、もし答えられないと他人が私のことをどんな風にするか気になるのである。	.239**
④	IV	働くということは、人間が生きていくために我慢しなければならない必要悪である。	.160**
5	II	いったん決断したことについてよくよく考えたりしない。	.368**
6	I	普通、人間はお互いに正直に、かつ誠実にかかわりあっているものだ。	.301**
7	VI	私は、とても話しやすい人間のようなだし、自分でもそう思う。	.436**
8	III	何か課題をやる場合には、全体の見通しを失わないためにも、その場その場のことだけに縛られないようにやっていく。	.301**
9	IV	私の仕事の出来ばえが、人のものと比較される時でも、私は最大の能力を発揮することができる。	.425**
10	VI	わずらわしい人とのお交際は、うまく避けている。	.013
⑪	IV	通常、勉強(仕事)しなければならない時には、それがいかなるものであれうんざりしてしまう。	.382**
12	II	友人の前で失敗しても、別にくよくよしない。	.393**
13	II	私がこれまで下した判断なり決断は、だいたいにおいて正しかった。	.364**
⑬	VI	私は、時には強く感情が揺り動かされることもあるが、人前では、決してそれをさとられないようにする。	.159**
⑮	II	何かしたあとで、それが正しかったかどうか、心配になることが多い。	.268**
16	I	最終的に職業を決定したら、きつともう人生を乗り越えられるであろう。	.395**
⑰	III	隠しておけるなら、家族や自分の育ちについて他人にしゃべりすぎないのが最善である。	.316**
⑱	V	私は、将来のはっきりした目標や計画がない。偉い人の判断に従っていけば無難である。	.262**
⑲	III	私は、これまで、学校のクラブ活動や生徒会活動に進んで参加する方ではなかった。	.388**
⑳	I	気がついていないと、人は私の弱味につけ込もうとするだろう。	.329**
21	I	一般的に、人間は信頼できるものだ。	.361**
22	V	今と違う顔つき、体つきであってほしいとはめったに思わない。	.217**
㉑	V	もし、自分の容姿がもっとよければ、もっとよい人生が送れるだろうに。	.242**
24	II	私くらいに年になれば、両親が反対しても、自分のことは自分で決断しなければならない。	.137*
25	IV	もし必要ならば、1つのことに注意を集中するのも難しいことではない。	.405**
㉓	V	私は、人生において本当に何をしたいのか決めることができない。	.542**
㉔	III	私はいつもあくせくしているが、どんなに一生懸命やっても、他の人ほどには成果があらならないように思われる。	.391**
㉕	VI	人との集まりで、他の人が私の考えに同意しないのではないかとと思うと、自分の意見をはっきりと主張するのにためらいを感じる。	.460**
29	VI	私には、腹を割って話し合えるような親友が一人くらいはいる。	.392**
30	V	人生をうまく成し遂げていく上で、私の容姿や行動が妨げとなっているとは感じない。	.326**
⑳	Y	うまく課題をやりとげた時でさえ、他の人は私のやったことを理解したり、是認をしたりしてくれないように思える。	.325**
㉗	III	青年が悪戦苦闘して克服していることの1つは、自分の家族との関係や、自らの育ちに関することである。	.098
33	I	私の人生の最良の時は、これから訪れるであろう。	.204**
34	VI	集団内で、私はちゅうちよすることなく、自ら正しいと思うことをはっきり表明できる。	.522**
35	VI	私はコンパやパーティで、他の人をなごませたり、楽しませたりする社交性があると思う。	.413**
㉙	VI	自分の感覚ではよくないと思うことを、まわりの仲間がやっている時に、ことわりきれないとごろがある。	.280**
37	VI	敵対する人がいる方が、親友がだれもいないことよりまだましである。	.100
38	V	私は生涯の仕事として何をしたいかははっきり決めていないが、とりあえず、ここ2~3年の計画や目標については、ある程度ははっきりしている。	.162**
㉚	III	人と知り合う時、その人があなたの生いたちや家族について、あまり知らない方が、親しくなりやすい。	.270**
㉛	IV	スポーツや試合など、いつも人と競争したり勝つことを要請されるようなものは、好きにはなれない。	.308**
㉜	I	本当に信頼のおける人はなかなかいないものだ。	.288**
㉝	VI	自分の人生のだから大事なことは人に頼らないで、自分で決断を下していると思う。	.376**
㉞	II	なごやかに、気楽にやっていくためには、他人とうまくやっていくかばならないが、それ以上親密になる必要もない。	.300**
44	III	私は家族に誇りを感じている。	.387**
㉟	IV	私は1つのことに集中することができない方だ。	.457**
46	III	現在、いかにたくさんの仕事に追われているとしても、次にやらなければならないことについて何らかの計画をもっていることはいいことである。	.173**
㊱	III	ここ2~3年の間、私はクラブやグループ活動にはほとんど参加していない。	.233**
㊲	V	これまで、私の仲間は私の能力に対して正当な評価や理解を示してくれなかった。	.379**
㊳	VI	たとえ好意の持てる人であっても、共に活動してきた人を本当に知ることはなかったように思う。	.459**
50	V	私は、本当に欲しい物を我慢して待つことができない方だ。	.519**
㊵	I	私は、現在自分が歩んでいる道にかなり満足している。	.119*
㊶	VI	人は他人と親しくなりすぎない方が幸せであろう。	.354**
㊷	IV	たとえ努力してはみても、1つのことに専念することは私にとって随分骨の折れることである。	.299**
54	III	10代の少年少女時代の楽しい出来事の1つは、仲間たちと一緒に規則や約束を決め、協同して何かをやることである。	.193**
㊹	IV	何か仕事に着手する時に、やらずにすみそうなことは、ことごとく回避する。	.278**
㊺	V	私のやり方は、他人に誤解を受けることが多い。	.359**
57	III	10代の時期に、クラブなどの集団活動に参加することのなかった人は、損をしてきている。	.252**
㊻	I	将来うまくいくかどうかを考えると、今まで絶好のチャンスを見逃してしまってきたように思う。	.465**
59	IV	私は難しいことがらに挑んでいくのが好きである。というのは、それを成し遂げることによって、大きな喜びが得られるからである。	.411**
㊽	III	私はいつもあくせくとして忙しいが、ともすればカラまわりばかりして、うまく前へ進んでいないように思える。	.350**
㊾	II	両親が、あなたのなすことやすることすべてを承認してくれることが、あなたにとっては、とても大事なことである。	.029
62	II	自分が他の人のようにうまくやれないということや人を人に悟られても、それほど気にはならない。	.258**
63	II	大体の場合、自分が決断した以上は、あとで悔やむことをしない。	.499**
64	V	将来自分が何をしたいか確信を持っており、あるははっきりした目標をもっている。	.482**
65	IV	自分がかかわったりやっていると気に散らすことなく専念することはさほど難しいことではない。	.388**
㊿	IV	いつも、人と競い合わなければならないような仕事をしていると落ちつかず幸せになれないだろう。	.183**
67	I	本当の幸せや成功につながるようなチャンスを逃してきたような気がする。	.586**
㊱	I	人は、自分にとって意味のあるものを得たい時には、そのために喜んで待つべきである。	.104
69	IV	私は、人と張り合ったり競争する場面で、仕事やスポーツをするとき、特にそれ苦にならないし気楽に楽しむことができる。	.494**
㊳	II	私は、何か重大な決断をしなくてはならない時には、いつでも家族から援助や助言を受ける。	.124*
㊵	II	人にとにかく言われるぐらいなら、人前では口をつぐんでいる方がよい。	.468**
㊷	I	私は、欲しい物を手に入れるのに時間がかかりすぎるとすれば、そのものに興味を失ってしまう方だ。	.334**

注1) ○印の項目は、逆転項目を示す。 ** P<.01 * P<.05

注2) I-VIはEriksonの発達段階を示す。

TABLE 2 REIS 得点の平均 (M) 及び標準偏差 (SD)
(N=245)

下位尺度 (項目数)	I (11)	II (11)	III (11)	IV (12)	V (12)	VI (10)	全体 (67)
M	49.19	44.78	54.39	53.02	54.70	44.94	301.02
SD	6.90	7.97	6.59	8.83	8.36	7.48	32.88

TABLE 3 REIS の折半法及びα係数による
信頼性係数 (N=245)

下位尺度	I	II	III	IV	V	VI	全 体
r _{SB} 注)	.542	.743	.581	.787	.616	.682	.850
α 係 数	.572	.710	.549	.749	.657	.683	.883

注) Spearman-Brown の公式による信頼性係数。

TABLE 4 REIS の再検査信頼性 (N=228)

下位尺度	I	II	III	IV	V	VI	全 体
r	.777**	.859**	.829**	.863**	.819**	.839**	.909**

** p<.01

TABLE 5 REIS—同一性混乱尺度間相関係数 (N=245)

REIS 同一性 混乱尺度	I	II	III	IV	V	VI	全 体
時 間 的 展 望 の 混 乱	-.185**	-.109*	-.174**	-.241**	-.174**	-.168**	-.247**
自 意 識 過 剰	-.202**	-.218**	-.231**	-.197**	-.267**	-.248**	-.319**
役 割 固 着	-.211**	-.173**	-.222**	-.195**	-.251**	-.163**	-.284**
労 働 麻 痺	-.166**	-.093†	-.218**	-.284**	-.219**	-.164**	-.270**
同 一 性 混 乱	-.245**	-.128*	-.280**	-.158**	-.300**	-.205**	-.304**
両 性 的 混 乱	-.120*	-.012	-.232**	-.122*	-.145*	-.157**	-.180**
権 威 混 乱	-.275**	-.131*	-.334**	-.230**	-.319**	-.240**	-.354**
価 値 混 乱	-.174**	-.139*	-.189**	-.158**	-.271**	-.135*	-.250**
全 体	-.225**	-.142*	-.267**	-.222**	-.278**	-.206**	-.313**

** p<.01 * p<.05 † p<.10

した。下位尺度ごとに見ると、IとIIIの値のようにそれほど高いと言えないものもあるが、全般的には、.60～.80程度の数値が多く見られ、信頼性は低くないと言えよう。殊に、67項目全体では、折半法及びα係数とも、.85以上の値を示しており、この観点からの信頼性は十分高いと言えよう。

次に、REIS を1週間間隔で2回実施した228名のデータに基づいて、両者の積率相関係数を算出したものをTABLE 4 に示した。それによれば、下位尺度Iの相関係数が若干低い以外は、すべて、.80以上の値を示しており、REIS の再検査による信頼性はかなり高いと結論

づけることができる。

以上の分析から、REIS は、内的整合性の観点からも、また安定性の観点からも高い信頼性を持っていると言つてよからう。

3. REIS の妥当性

まず、同一性混乱尺度との関係を分析することにより、REIS の併存的妥当性の検討を行った。TABLE 5 に、REIS と同一性混乱尺度の下位尺度ならびに全体得点との積率相関係数を算出し、有意水準と共に示した。全体的に見れば、それほど高い値とは言えないが、殆どの箇所でも負の有意な相関係数が得られている。このことから判断して、REIS の併存的妥当性は、十分高いと言えらる。

次に、2点から REIS の基準関連妥当性の検討を行った。

これまで行われてきた種々の研究から、自我同一性は不安(顕在不安など)と、負の有意な関係があることが知られている(例えば、Howard & Kubis, 1964; 田端, 1981 など)。本研究では、清水・今榮(1981)が作成した

Spielberger の状態・特性不安検査(State-Trait Anxiety Inventory: STAI)の日本語版のうち、特性不安*(A-Trait)をとりあげ、REIS との関係性を分析した。その結果を示したものが、TABLE 6 である。REIS の下位尺度ごとに見れば、IIとVが1%水準でA-Trait と有意な負の相関が認められた。また、IならびにIV, VIがA-Trait と負の有意な傾向を示した。REIS の全体得点では、相関係数の値は-.161であり、これは、1%水

* 状態不安(A-State)については、一時的に見られる不安であり、自我同一性との関係を検討するには適さないと思われ本研究では用いなかった。

TABLE 6 REIS—特性不安 (A-Trait) 尺度間相関係数 (N=245)

下位尺度	I	II	III	IV	V	VI	全体
<i>r</i>	-.088†	-.215**	-.036	-.084†	-.165**	-.084†	-.161**

** $p < .01$ † $p < .10$

TABLE 7 REIS-Self-esteem 尺度間相関係数 (N=245)

self-esteem 尺度	REIS I	II	III	IV	V	VI	全体
a 注)	.113*	.205**	.208**	.166**	.214**	.164**	.251**
b	.174**	.141*	.261**	.158**	.270**	.187**	.277**
c	.086†	.061	.162**	.120*	.125*	.070	.145*
d	.147*	.131*	.116*	.106*	.201**	.061	.179**
e	.140*	.169**	.249**	.163**	.257**	.175**	.269**
全体	.138*	.146*	.216**	.151**	.224**	.145*	.238**

** $p < .01$ * $p < .05$ † $p < .10$

注) a~e の下位尺度はそれぞれ、「自己の能力・意見に対する肯定的確信」, 「自己の人生に対する肯定的態度」, 「独立・同情排除」, 「劣等感」, 「自己のパーソナリティや能力の肯定的受け入れ」を示す。

準で有意であった。

以上の分析から、REIS の下位尺度Ⅲでは、有意な相関が見られなかったが、それ以外ではいずれも有意（もしくは傾向）な値を示しており、不安尺度との関係において、REIS の妥当性の低くないことが示されたと言えよう。

次に、REIS と self-esteem との関係について検討した。これまでの研究において、自我同一性と自尊感情（ないし自己受容）とは、有意な正の相関があることが見出されている（Rasmussen, 1964 など）。TABLE 7 には、REIS と self-esteem の各下位尺度ならびに全体得点との積率相関係数を算出して示した。これによると、それほど極端に高い数値は見られないものの、殆どにおいて、有意な正の相関係数が得られている。このことから考えて、REIS は十分妥当な尺度と言ってよからう。

以上、併存的妥当性ならびに基準関連妥当性の観点から、REIS の妥当性について検討した。いずれの分析においても、REIS は、十分妥当な尺度であることが示されたように思われる。

まとめと今後の課題

Rasmussen の自我同一性尺度は、欧米諸国で最も頻繁に用いられているものの1つである。最近でも、Enright, Lapsley, Cullen & Lallensack (1983) らが、この尺度の検討を進めており、利用価値の高さについて

は改めて言うまでもない。

本稿では、以前の宮下・平野 (1981) の研究で日本語訳された Rasmussen の尺度をよりよいものにするために被験者数の拡大などを行い、幾つかの観点から信頼性と妥当性の検討を行った。そして、この尺度が、比較的高い信頼性と妥当性を持っていることが実証的に示された。

しかし、本研究では、被験者の男女比のアンバランスから、性差の検討は行わなかった。自我同一性に関する性差は当然予想されるものであり、今後は男子を追加しこの点を検討すると共に、この尺度を用いて実証的研究を積み重ねていきたいと考えている。

引用文献

- Adams, G.R., Shea, J., & Fitch, S.A. 1979 Toward the development of an objective assessment of ego-identity status. *Journal of Youth and Adolescence*, 8, 223-237.
- Bourne, E. 1978 The state of research on ego identity: A review and appraisal II. *Journal of Youth and Adolescence*, 7, 371-392.
- Dignan, M.H. 1965 Ego identity and maternal identification. *Journal of Personality and Social Psychology*, 1, 476-483.
- 遠藤辰雄 (編) 1981 アイデンティティの心理学 ナカニシヤ出版
- Enright, R.D., Lapsley, D.K., Cullen, J., & Lallensack, M. 1983 A psychometric examination of Rasmussen's Ego Identity Scale. *International Journal of Behavioral Development*, 6, 89-103.
- 福富 護 1981 同一性地位に関する実証的研究—女子大生に対する同一性地位尺度化の試み—東京学芸大学紀要, 32, 183-197.
- Hodgson, J.W., & Fisher, J.L. 1979 Sex differences in identity and intimacy development in college youth. *Journal of Youth and Adolescence*, 8, 37-50.

- Howard, S.M., & Kubis, J.F. 1964 Ego identity and some aspects of personal adjustment. *Journal of Psychology*, **58**, 459-466.
- 古沢頼雄 1968 青年期における自我同一性と親子関係
依田 新 (編)現代青年の人格形成 金子書房 67-85.
- Marcia, J.E. 1965 Determination and construct validity of ego identity status. *Dissertation Abstracts*, **25** (11-A), 6763.
- Marcia, J.E. 1966 Development and validation of ego-identity status. *Journal of Personality and Social Psychology* **3**, 551-558.
- 宮下一博・平野潔 1981 Rasmussen の自我同一性尺度の検討 (I) (II) 中国四国心理学会論文集, **14**, 48-49.
- 無藤清子 1979 「自我同一性地位面接」の検討と大学生の自我同一性 教育心理学研究, **27**, 178-187.
- 中西信男・佐方哲彦 1983 青年期における同一性の発達—エリクソン心理社会的段階目録 (EPSI) の改訂昭和57年度文部省教育研究開発に関する調査研究報告書『幼児・児童・生徒の心身発達の状況と学校教育への適応について (成人に至るまでの心身発達の望ましいあり方)—同一性と社会的発達の研究とそれを促進する心理教育』関西青年心理研究会, 5-21.
- 根本橋夫 1972 対人認知に及ぼす Self-Esteem の影響 (I) 実験社会心理学研究, **12**, 68-77.
- Rasmussen, J.E. 1961 An experimental approach to the concept of ego identity as related to character disorder. *Dissertation Abstracts*, **22** (5-A), 1911-1912. (American University, Dissertation, 1961)
- Rasmussen, J.E. 1964 The relationship of ego identity to psychosocial effectiveness. *Psychological Reports*, **15**, 815-825.
- Rosenthal, D.A., Gurney, R.M., & Moore, S.M. 1981 From trust to intimacy: A new Inventory for examining Erikson's stage of psychosocial development. *Journal of Youth and Adolescence*, **10**, 525-537.
- Schenkel, S., & Marcia, J.E. 1972 Attitudes toward premarital intercourse in determining ego identity status in college women. *Journal of Personality*, **40**, 472-482.
- 清水秀美・今栄国晴 1981 STATE-TRAIT ANXIETY INVENTORY の日本語版 (大学生用) の作成 教育心理学研究, **29**, 348-353.
- Simmons, D.D. 1970 Development of an objective measure of identity achievement status. *Journal of Projective Techniques and Personality Assessment*, **34**, 241-244.
- 砂田良一 1979 自己像との関係からみた自我同一性 教育心理学研究, **27**, 215-220.
- 田端純一郎・乾原正・西田仁美・古瀬謹一 1978 自我同一性の発達の研究 日本教育心理学会第20回総会発表論文集, 712-713.
- 田端純一郎 1981 EIS-II による自我同一性の研究 日本教育心理学会第23回総会発表論文集, 820-821.
- 高橋裕行 1984 自我同一性と Marcia の同一性地位面接：批評的展望 教育心理学研究, **32**, 320-328.
- Tan, A.L., Kendis, R.J., Fine, J.T., & Porac, J. 1977 A short measure of Eriksonian ego identity. *Journal of Personality Assessment*, **41**, 279-284.
- 鎌幹八郎・山本力・宮下一博 (共編) 1984 自我同一性研究の展望 ナカニシヤ出版
- Wilkerson, J., Protinsky, H.O., Maxwell, J.W., & Lentner, M. 1982 Alienation and identity in adolescents. *Adolescence*, **17**, 133-139.
- Woods, N., & White, K.L. 1981 Life satisfaction, fear of death, and ego identity in elderly adults. *Bulletin of the Psychonomic Society*, **18**, 165-168.

(1986年10月29日受稿)